

今回も教本の中の言葉についてです。

教本には「正しい」という言葉がたくさん出てきます。

身形の正しさ・正しい規矩・正しい呼吸・上体を正しく保つ・骨格の正しいあり方、などなど弓道は正しい射技を身につけなければならないということが説かれています。

ところが、教本の冒頭に掲げられている『礼記射義』には「内志正しく」「正しきを己に求む」「己正しくして而して発す」と「正しい」が連発されていますが、射技の基本として求められている「正しい」と『礼記射義』の「正しい」は同質には考えられません。

「正しい」という言葉は、「対象に向かって直線的・直接的で、何の曲折も、へだてもない」というのが元々の意味です。そこから倫理的な意味が付け加わってきました。内面に道徳や倫理を求めているのが『礼記射義』の「正しい」の使われ方です。『礼記射義』では「外体直く」と、人間の心と体で使い分けされています。

また、教本には「正気を養い、正技を練る」とあります。この「正気」は「せいき」と読みます。これを「しょうき」と読むでは意味が分からなくなります。「しょうき」は日本での読み方で、精神状態の正常な様子（正気の沙汰ではない、など）やしらふのこと（正気を失うまで飲んだ、など）です。「正気（せいき）」は、古代中国の思想で広く天地人の間に存在するという、正しくて大きな根本の力をいい、この世界を成り立たせていると考えました。五行思想はこの気を五つに分け、それぞれの勢力が交替循環して万象を変化させると考えるものです。「気」の旧漢字は「氣」です。一説に、米を炊く時に上がる水蒸気が原義とされます。古代の中国は思想・哲学が豊富で、『論語』をはじめ日本は多くを取り入れてきました。弓道は、日本独特の弓具と射術と中国の古代思想で成り立たせているといってもいいかもしれません。

この天地人の間に満ちている気を体に充満させるというのが、『孟子』のいう浩然の気です。その気は極めて廣大、極めて剛健、正しく素直で、そのまま気を養っていくと、ついには天地の間にも満ち満ち、何物にも屈しない道徳的勇気となる、というものです。

弓を引分けて会に至った時、疑い、不安、弱気、恐怖、卑下感などを払拭して、克己、冷静、忍耐、決断力など心気の充実につとめる、と教本にあります。まさに道徳的勇気といってもいいでしょうが、その直前に「会」は不動心の連続ということが書かれています。この不動心、先ほどの『孟子』で浩然の気が述べられている直前に置かれています。『孟子』の説く不動心は自らに省みて天地に恥じない自分を見出すなら、「千万人といえども我往かん」、何の恐れもなく動ずることはない、という心境です。ただ、『孟子』も40歳になってその心境になったと書いてあります。

弓道では、気力の充実、気合の発動、そして気は技に優先する、など「気」を働かせることを求められます。気を生かす体勢つまり生気体も習得に努めなければいけません。

今回述べてきた話は、皆さんが弓道の修練を行う際に「正気を養い、正技を練る」ということを考えるヒントになるでしょうか。